

大阪・大坂城三の丸（京橋口）遺跡

- 1 所在地 大阪府大阪市東区京橋前之町
- 2 調査期間 一九八〇年（昭五五）二月～四月
- 3 発掘機関 追手門学院校地学術調査委員会
- 4 調査担当者 藤井直正
- 5 遺跡の種類 近世城郭
- 6 遺跡の年代 安土桃山時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大阪市のほぼ中央、上町台地の突端に所在する大坂城は、天正十一年（一五八三）豊臣秀吉の築城にはじまり、江戸時代には徳川幕府による支配の拠点となったところで、壮大な石垣と二重の濠で囲まれた本丸跡・二の丸跡は特別史跡に指定されている。

濠の外側、すなわち東西南北の各周辺部には三の丸の区域がひろがっていたが、明治以後市街地となって現在に及んでいる。

今回調査を行なったのは、大阪市東区京橋前之町に所在する追手門学院大手前高等学校・中学校の敷地で、校舎の改築に伴い、その建築面積九九〇平方mについて全面発掘を実施した。

発掘区域の東半分にあたる第一区では、明確な遺構はなかったが地表面下約二mに青灰色粘土層がひろがり、この上面に屋瓦片・土

器を包含する層を検出したほか、大小の石材が落とし込まれた状態で出土し、現在の地表までが整地層であることがわかった。西半部の第二区も同様な状態であったが、発掘区域の中央に南北一〇m・東西六m・高さ一mの石垣状の遺構（SK〇一）を検出した。この石垣状遺構の周辺から第二区の西半にかけては、地表面下一・五mのところに厚さ七〇cmの屋瓦片を包含する黄褐色土層がひろがっていた。これを掘り下げて行なったところ、幅四～五m・南北六・八m、深さ二・二mの杓子状を呈する土壙（SK〇二）を検出した。内部の土は暗灰色系の上層と黒色系の下層に大別することができ、上部には金箔瓦をふくむ屋瓦片が充満し、これに混じって多種多様、しかも多量の木製品・陶磁器片が出土した。さらにこの西北部にも、南北二・五m、東西三・五m、深さ一m弱の楕円形の土壙（SK〇二）を検出した。これらの土壙は、大坂落城時すなわち慶長・元和の役あるいはその前後における整地に際して、不用物を投棄するために掘られたものと考えられる。なお第二区では、かなり広範囲にわたって地表面下五m前後のところにも遺物包含層（下部包含層）があり、屋瓦片・木製品・陶磁器片等が出土している。

本遺跡では、現在のところ六本の木簡を検出しているが、上記の遺構と対照すると、第二区土壙（SK〇一）内三、同（SK〇二）内二、下部包含層一である。

8 木簡の釈文・内容

(1) 〓与兵衛

小野〓右衛門尉

・ 〓斗二〓
〔升カ〕此内〓

171×29×7.5 033

(2) 〓庵物〓

115×19×4 031

(3) 〓〓〓〓〓

82×13×4 032

(4) 〓〓〓〓〓〓
〔セカ〕

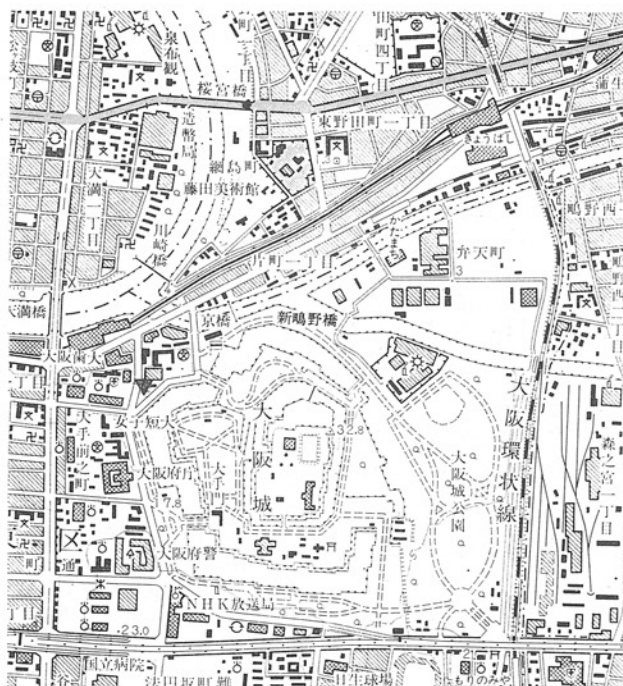
(164)×18×3 039

出土木簡六点のうち、墨書のあるのは右の四点である。积文は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部による。(1)は下部包含層、(2)はSK〓一、(3)(4)はSK〓二から出土した。このほかSK〓一から、墨痕の認められないもの二点が出ている。その一点は、一六一×二七・五×二mm、〓三型式で、完形。もう一点は、九四×九×二mm、〓三一型式で、上端の先端近くと下端を欠き、一見人形のような感をうけるが、下端に切り込みの一部を残しているので、一応木簡とみてよいであろう。

以上のほかに、人形との区別が困難なもの一点、建築部材断片の木口に墨で黒丸を書いたもの一点がある。

9 関係文献

追手門学院校地
学術調査委員会 『大坂城京橋口遺跡―現地説明会資料―』一九八〇年



大坂城三の丸遺跡木簡出土地点図

「大坂城三ノ丸跡」(考古学ジャーナル
一八〇)

一九八〇年

『大坂城三ノ丸』

一九八一年(予定)

(藤井直正・榮原永遠男)